カミサマ物語

ムジコ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
カミサマ物語

【Ｎコード】
Ｎ６８６８Ｚ

【作者名】
ムジコ

【あらすじ】
新連載→作者の都合→打ち切りにならないように頑張ります。
最強物、ハーレム、理不尽な進行など、その他諸々含みますがそれでも構わん。という器が銀河系より大きい人はぜひ。

第1話　神様って幼女か爺のどっちかだと思ってたよ（前書き）

がんばるぞー

第1話　神様って幼女か爺のどっちかだと思ってたよ

――部屋がある。

――只々白くドアが1つだけある部屋が。

――部屋、と言ってもその広さは計り知れない。

――部屋とはもう言えないかもしれない。

――だがそこは部屋なのだ。

――生物の気配はしない。音も響かず、変化もない。

――只白く、広い部屋。

ガチャリ、という音を響かせながら誰かが部屋に入ってくる。

性別を記すならば女性、それもとびっきりの美女だ。どこか神々しささえ感じられる。

「やはりいないか……」

女性は何かを探すようにしてそう呟く。

「あいつが現れた気配はした、もう空間を何百と回った。だがなぜ見つからない、私がこんな失敗をするなど……」

気のせいだったか、と言いながらその部屋を出ようとしたが。

ドサリ、という音が、何かが落ちたような音が響く。

物体の正体は人。青年であった。

女性はニヤリ、というような擬音がつきそうなほど笑みを浮かべる。

「やっと来たか、世界に爪弾きにされた者よ」

まるで新しい玩具を買い与えられた子供のように笑う女性。

青年はなぜこの白い部屋に現れたのであろうか。

……

……

……

…

それはある朝のことだった。

その青年はいつものように家を出て、いつものように学校へ向かおうとした。

「行ってきます」

いつものように形だけの挨拶。だが、それは彼に返ってくるわけでもなく、ただ虚空に響くだけだった。

「今日の夕飯はどうすっかなぁ…、材料はあるにはあるがいかんせんレパートリーがなぁ…」

彼がこのように主婦的な考えをしているには理由がある。

彼の母親は彼が生まれたときにすぐに死去。
彼の父親は不幸な事故にあい死亡した。
彼が８才のときであった。
親戚に引き取られたがその親戚もあまり家に帰ってこないため必然的に彼は家事スキルを磨くことになった
実質１人暮らし同然だったので当然のことであろう。家計簿をつけるのも彼である。

まぁそんなことは置いておこう。

「っ！？…なんだ？いったい…、胸が…苦しい…」

しばらく歩くと彼は急に胸の苦しみに襲われた。

「これはまさかっ…恋？」

何に対してだろうか……

「いやいやふざけてる場合じゃねぇよ。まじで苦しいんですけど、

もうギリギリなんですけど、色んな意味で」

今彼の周りには人はいない。助けを求めようにも意味がない。

「あー…くそっ、なんなんだよ…、あれ…？目の前が…く…ら……く…」

その瞬間彼は意識を失い、その場に倒れた。

……

……

……

…

「……ぅん？ここは…どこだ…？」

彼が目覚めたのは白い部屋、何もない白い部屋だった。

「やっと来たか、世界に爪弾きにされた者よ」

彼の側には女性がいた。

「……なるほど、夢か。夢ならいいや、もう一度寝てしまおう。きっと起きたら近所の幼馴染みの女の子が起こしに来てくれて嬉し恥ずかしハプニングが発生し互いにドキドキしつつ、意識してしまうというイベントが起こるに違いない」

さぁ寝るぞー、と彼は言いつつモソモソと丸まろうとした。

ちなみに彼に幼馴染みの女の子などいない。

「…こら、現実逃避をするな、起きろ」

彼の側にいる女性は彼をゲシゲシと蹴りながら起きるよう催促する。

「あー…痛みも感じるなんてリアルな夢だなぁ」

「いい加減起きんか！！」

遂に怒りの沸点を越えたのか女性は彼の腹に踵を落とした。

「おふぅっ！！」

鳩尾に入ったのか盛大に吹き出し、彼はまた気絶した。

……

……

……

…

「で？ここはどこなんだ？夢じゃないってのはわかったし、俺はさっきまで道を歩いていたはずなんだが…」

意識を取り戻した彼は現状を把握したのか女性に訪ねる。

「ふむ、もう少し取り乱すと思ったのだが…よく落ち着いていられるな？」

「まぁ理不尽な目に合うのは慣れてるというか慣れてしまったというか…」

「ふむ…トラックに轢かれかけたり放火されたりピンポイント落雷が起きたりか？」

「おー…特に落雷がやばかった。ほぼ俺の目の前に落ちたからな、ゴム性の長靴だったから無事だったけどな…」

「……お前は「何で知ってるんだ！？」とか言わないのだな。過去を知る他人がいたら普通は驚くと思うのだが…」

「うん？いやー…何かね、あんたなら知ってると思ったんだよ。…何でだろう？」

確かに落ち着き過ぎだと思う。

「ククッ…まぁいい、ここがどこか、だったな。まぁ名前は決まってない。只の『部屋』だ」

「ふ～ん、部屋ねぇ…んじゃあもう2つ質問だ。……あんた誰？何で俺はここにいる。」

青年は混乱こそしてないもののいきなり知らない場所にいるという不安を感じていた。

「まぁアレだ、私は俗に言う神様、っていうやつだ」

「ふむ、まぁそうだろうとは思っていたけど」

「つまらん奴だな…もう少し驚いてくれてもいいと思うのだが…、まぁいい…お前がここにいる理由だったな、それは私が最初に言った通りお前が世界に爪弾きにされたからだ」

「はぁ？」

「いや、分かりやすく説明するとだな、まずお前がいた世界の最大容量が1テラバイトだとする」

「ふむふむ」

「お前がいた世界の人間はそれこそ1人の容量はヘクトにも満たない、有能な指導者などがようやく1キロを越えるかどうかだったんだ。だが…」

「だが？」

「お前が産まれた」

「？」

「お前の容量はテラなどとうに超越していた、それこそエクサやゼタも越えるほどに」

「なにそれこわい」

「……続けるぞ。それでだな容量がこのままではパンクしてしまう。ならばどうするか、……1番割を食うデータを消すしかない。だからお前はここに移された。お前は神（こっち）よりの人間だったからな」

「へー、なるへそね。ようするに、
俺☆爆誕
←
やべぇこいつスゲー重ぇ（データ的な意味で）
←
どうする？こいついたら世界終わっちゃうよ？
←
じゃあ弾き出せば良くね？
←
今ここ。　というわけか」

「ああ、赤ん坊のときはまだ良かったんだが…成長するにつれて限界がきてな…お前が理不尽な目にあっていたのもそのせいだ、世界がどうにかお前を消そうとしていた、…なぜ生き残れていたのか不思議だよ…」

青年　ＳＩＤＥ

ふむふむ、要するに俺スゲー、ということね。

まぁあの世界に未練なんかないしな。別にどうってことねぇけど。
大切と思える人も１人もいなかったし。

あれ？でも俺ここに来たはいいけど…何しやいいんだ？一応まだ未成年だしなんもすることなくね？

はっ！？もしかしてニートか！？ニートになれるのか！？
それだったら俺はとっても嬉しいぞ。

寝て、食って、遊んで、また寝る。

……何という楽園…。

「おい神様、ここに連れてこられたはいいが俺は何しやいいんだ？夢のニート生活ができるのか？」

「馬鹿かお前は…お前はもう神（こっち）よりの人間だと言っただろう。お前は言うなればカミサマだ。もちろん寿命の概念は無いし老けることもない、殺されれば死ぬがな、……お前はまだ未熟だからな、修行してから違う世界にでも行ってこい」

ジーザス…神は死んだ…あ、俺の目の前にいるや。

ん？修行してから違う世界に行く？

……どういうことだ？

「まぁあれだ、神様に近いカミサマになったとはいえ今のお前は只のパンピーだ。刺されれば死ぬし潰れても死ぬ。経験も足りないからな、修行なりなんなりして戦争がある世界にでも行って来い」

「なんでだよ！カミサマってそんなにデンジャラスなことしなきゃならんのか！？あれか！？神様同士の喧嘩でもあんのか？」

「いや、神同士の戦闘はあまりないのだがな…神が悪ふざけで殺した者に力を与えて違う世界に、マンガなどの世界に送るやつがいてな、転生者というやつだ。…好き勝手やりすぎて物語がめちゃくちゃになるのだよ。お前にはそれを防いだりしてほしいんだ」

なんじゃそりゃ？っていうかマンガの世界ってあったんだなぁ…まぁもしもの数だけ世界は存在しているっていうしな。無いこともないんだろう。

「力ってどんなのが与えられるんだ？そいつらには」

「私はそんなわざと人間を殺して楽しむような下衆な行為はしたことがないからよくわからんが…たしか『王の財宝』？とか『～～の魔力１００倍』とかを与えたりしたとか言っていたな、よくわからんが。まあその神は下衆な行為をした罪で「滅」したが」

いや無理ゲーだろ。勝てねえよ。指先１つでダウンさせられるわそんなもん。いや、俺にもそういうのがもらえるのか？それだったらまだ……

「やらんぞ」

「ぅおい！死ぬって！間違いなく！くれよ！」

「はぁ……お前なにか勘違いしてないか？」

「は？」

「さっき言っただろう、お前の容量は馬鹿でかいと」

「あ、ああ。それがどうかしたのか？」

「他の人間の容量は小さいからな、強くなるにしてもたかがしれている。お前がそんなもん持っていても宝の持ち腐れ、邪魔になるだけだ。そうだな……１０年、１０年だな、それだけ真面目に修行し

ていたら転生者なんぞ雑魚に感じるようになる。指先１つでダウンさせれるようになるぞ。１０００年で私にも並ぶだろうな」

おぅ……まじすか。ん？でも……

「あんたはそんなに強ぇのか？」

「あたりまえだろう。これでも最高神だからな、私からしたら皆ドングリの背比べだ。なに、すぐにお前も私くらいのレベルにまで上げてやろう、いい暇つぶしにもなるしな」

は？……最高神？

「お前ってそんなに偉かったのか…つうか俺もそこまで強くなれるのか？実感がわかねぇんだが」

「私が最高神だと知ってもお前は態度を改めないのだな…」

「それが俺クオリティ」

「ふふっ、まぁいい、お前がおもしろいやつだということは十分わかったからな」

褒められてるん……だよな？

「さあ！そうと決まればさっそくやるぞ！とりあえず目標は下級神だ！転生者なんぞ通過点だからな！みっちりシゴいてやろう！なに、転生者の数はそんなにいないし平和に暮らそうとしている者のほうが多いからな、質の悪い奴は極少数だ、観光気分で行ってこい。恋人でもつくったらどうだ？」

「おい！待てって！大事なことを忘れてるぞ！」

「む、大事なこととはなんだ」

「自己紹介だよ自己紹介、いつまでもお前だったりあんたって呼ぶわけにはいかんだろう？俺もできるなら名前で呼んでもらいたいしな。まあ神様だったら知っているとは思うが」

「おお！すっかり忘れていたな！私と同格の者が来て少々舞い上がっていたようだ、わたしの名はルーだ、よろしく頼む！」

「ルー、ルーだなわかった、俺は……天月、天月早紀だ、よろしくな。女みたいな名前とか言わないように」

……こうして俺の『物語』が始まったのであった…

『カミサマ物語』第1話　完

第1話　神様って幼女か爺のどっちかだと思ってたよ（後書き）

がんばったぞー

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6868z/

カミサマ物語

2011年12月23日00時54分発行